

ライフコースの視点から見た スポーツ活動参加パターンに関する研究

○藤本淳也（大阪体育大学スポーツ産業特別講座研究員） 原田宗彦（大阪体育大学）

ライフコース 縦断的研究 スポーツ活動 コーホート

1. 緒言

これまでスポーツ・レジャー活動参加に影響を及ぼす要因に関する研究は、ある特定のライフステージに注目した横断的な研究が主流であった。しかし、人間の一生をいくつかの段階に分類し、その平均的特徴をとらえるライフステージの視点、あるいはその段階の規則的変化過程を指すライフサイクルの視点には、段階への分類があまりにも単純化・標準化される傾向があること、各段階に属する者には集団的統一性があることが前提とされていること、そして、個人の人生における歴史的背景を重視していないこと、などの限界が指摘される。今後は、個々人が過去から現在までどのようなパターンで経験をしてきたか、というような過去のスポーツ・レジャー活動参加経験を一連のプロセスとしてとらえ、そのメカニズムを明らかにしていく必要があると思われる。特に、スポーツ・レジャー活動への関心の高まりにともなって、その欲求やニーズもますます多様化・個別化の傾向を見せている今日においては、より重要といえる。本研究は、ライフコースの視点からスポーツ活動参加に影響を及ぼす要因の解明を試みるとともに、ライフコース研究の今後の方向性に考察を加えることを目的とする。

ライフコース研究は、近年社会学者や心理学者の間で注目を集めており、「個人の一生にわたる生活構造(意識の変化、身体の変化、社会的役割の移行)の変動プロセス」と定義される(大久保, 1985)。そして、その研究の目的は人間の一生という現象のメカニズムを分析して、この現象を支配している法則性ないし傾向性を探求することであり、個人の歴史的背景を重視しているという特徴がある。

2. 先行研究

縦断的視点からスポーツ・レジャー活動の参加パターンに注目した研究はいくつか報告されている(McGuireら;1987, Scottら;1989, 原田ら;1990)。しかし、これらの研究は、例えばMcGuireら(1987)が65歳前後のレジャー活動参加レベルの変化を測定しパターン化を試みたように、ある一時的な側面に注目したものが多く、一生涯の変化のプロセスの解明には及んでいない。ライフコースの視点から捉えた研究は、年齢コーホートに注目し、活動を開始および中止する割合が加齢によって一定の傾向があることを示したJacksonら(1988)やWalshら(1990)の研究、そして、コーホートによってレジャー活動の阻害要因が異なることを指摘したMcGuireら(1986)の研究やがある。また、Rudman(1986)はライフコースにおける社会経済的役割の移行とスポーツ参加の関係を調べ、Hastingsら(1989)はマスターズ水泳選手のキャリアの変化をライフコースの視点から分析している。現在、人々の欲求やニーズはさらに多様化・個別化の傾向を強めているため、今後はライフコースの視点からそのメカニズムの解明への取り組みがより有効であると思われる(McGuire, 1987)。

ライフコースの視点から人間の一生という現象を役割移行(role transition)として捉えようとする場合、設定される時間軸は個人的時間(年齢)、社会的時間(例えば家族周期)、そして歴史的時間(時代)の3種類が必要となる(大久保, 1991)。そして、複数の軸を用いることによってスポーツ・レジャー活動参加の変化が加齢の影響なのか、結婚のためか、あるいは時代の変化が要因なのかというような、どの軸の影響力が大きいのかについても十分に検討することが重要である。そこで、本研

究では得られた情報内で分析を進めるとともに、この研究の今後の方向性に考察を加えていくこととした。

3. 研究方法

本研究におけるデータの収集は、岐阜県I町の選挙人名簿からランダムに抽出された1500人を対象に、1992年6月6日から7月9日の約一ヶ月間、郵送法による質問紙調査によって行われた。調査内容は、過去、現在、そして将来の余暇活動、活動状況、種目や頻度などによって構成された。また、過去の余暇活動経験については経験種目とその実施期間(開始年齢と修了年齢)、そしてやめた理由を回答してもらった。分析には、得られた回答479(回収率31.9%)の中から30歳~59歳の過去のスポーツ活動経験者151を用いた。さらにライフコースの統計的分析を行うためサンプルを3つのコーホート(30代コーホート、40代コーホート、50代コーホート)に分類し、コーホート間分析およびコーホート内分析(性別比較)を行った。

5. 結果

図1は、3つのコーホート間の過去のスポ

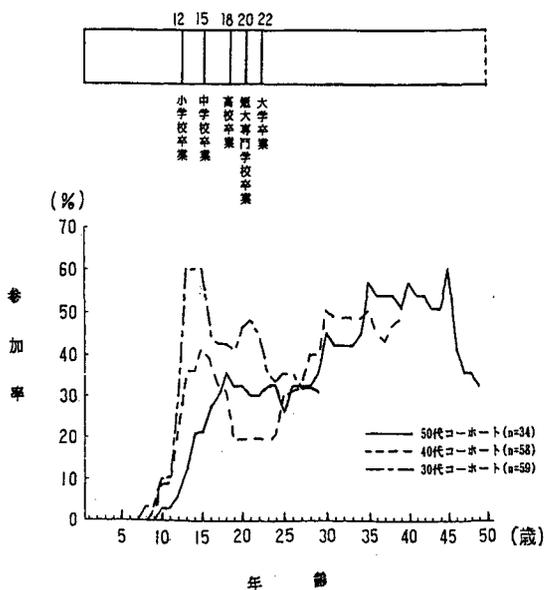


図1. コーホート別スポーツ活動参加パターンと卒業年齢の対比

ーツ活動参加パターンと社会的時間(例:卒業年齢)の対比を示したものである。横軸は年齢を縦軸は参加率(その年齢でスポーツ活動に参加していた人数÷過去のスポーツ経験者数×100)を示している。この図から各コーホートの参加パターンが異なることがわかった。まずどのコーホートも12歳頃から急激に参加率が高くなっているが、その値は若いコーホートほど高い傾向を示した。これはこの時期にスポーツ活動に参加しやすい環境が若いコーホートになるほど整ってきたのではないか(時代効果:period effects)、と推察される。また、15歳と18歳前後で30代、40代コーホートの割合が落ちているのは、「中学・高校卒業」というライフイベントを迎える一定の年齢に達したこと(年齢効果:age effects)が要因と思われる。図2は、40代コーホート内で男女別の参加パターンを示したものである。この図から男性に比べて女性の参加率は高校卒業時期に大きく下がり、再度上昇するまでの期間も長いことがわかった。これは卒業後の結婚、子育てなどの要因が影響しているものと推察される。発表当日は配布資料を加えて詳しい報告を行う。

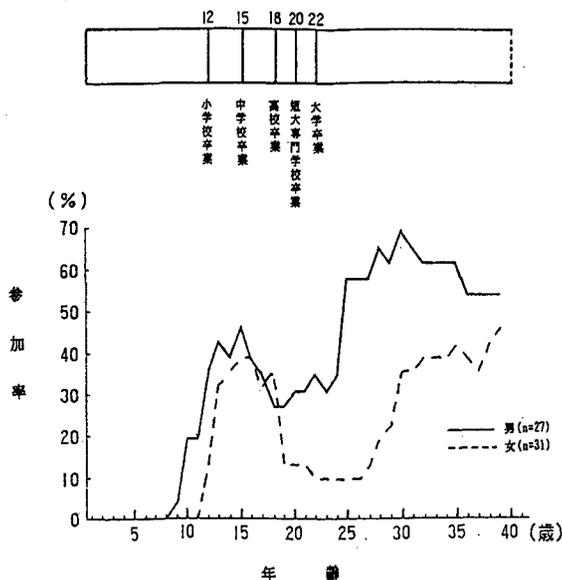


図2. 男女別スポーツ活動参加パターンと卒業年齢の対比(40代コーホート)